

MARUMO LIGHTING NEWS

■ 1977-2・Vol-24

……星はまだ姿を隠さず、数だけが少なくなっていた。空は柔かい青味を帯びていた。…略…明方の風物の変化は非常に早かった。少時して、彼が振り返って見た時には山頂の彼方から湧上るように橙色の曙光が昇って来た。それが見る見る濃くなり、やがて又褪はじめると、四辺は急に明るくなって来た。

………志賀直哉作「暗夜行路」より………

自然の変化を、写實的に美しくみせる照明ノ心の変化を表現する抽象的な照明ノどちらもむつかしい課題です。ライティングニュースが皆さんの役に立つよう期待します。



ジュリアス・シーザー=俳優座

たのしい舞台照明

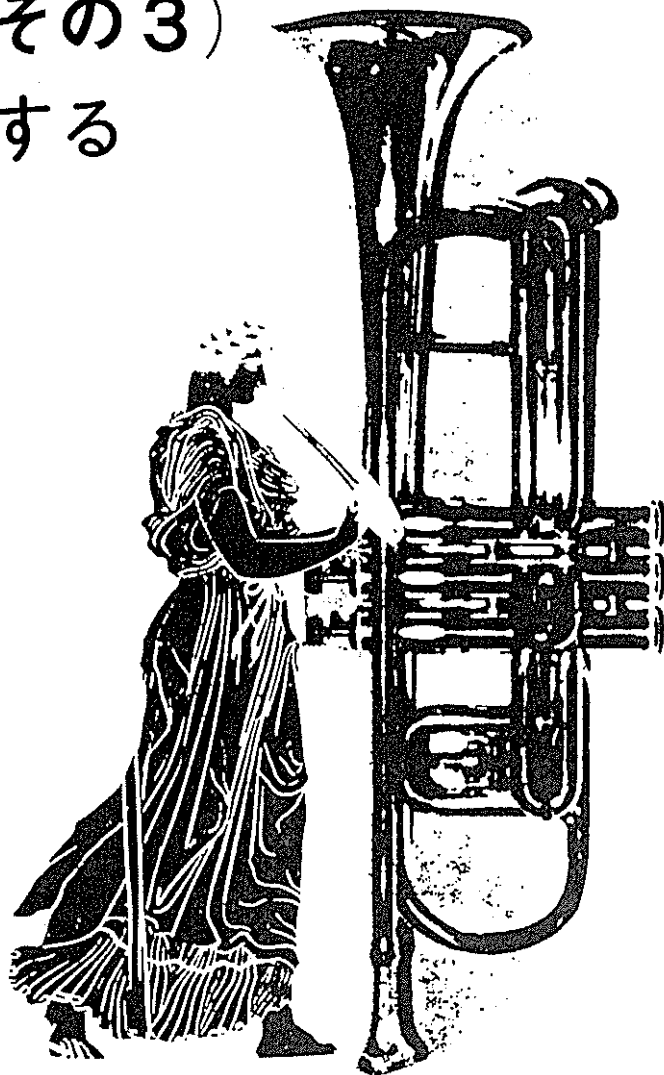
演出と照明（その3）

各種催物に対する

演出照明

牛丸 光生

女子美術大学講師



1. 講演会

講演会は、ただ明るければよい、というものではない。ただ明るいだけでは、照明の役割も、演出照明もありません。そこで、講演会の仕組みを改めて考えてみましょう。

講演会は、まず演者、それから聴衆、それに司会

など、会の内容質を問わなければ演者が多い場合か、1人か2人の場合もあります。基本的には以下の項目別に考えましょう。

- イ. 演壇附近が明るい。
 - ロ. 演者が眩しくない。
 - ハ. 観衆が、演者をみやすい。
 - ニ. 客席の明るさ。
 - ホ. 看板等を見やすくする。
- 詳説すると、

イ. 演壇附近が明るいこと。

視覚的要素として、光の明るさが最も重要な処です。演壇附近が、一番明るいこと、聴衆が見やすく、また聴きやすいということになります。少なくとも、演者に集中させるという効果では、フロントサイドスポットやサスペンションライトの使用されます。

また、ボーダーライトも、中央明るく、上下の回路を少し、落すようにするのも一案ですが、あまり極端な明暗は好ましくない。

ロ. 演者が眩しくないこと。

フロントサイドスポットの角度では演者が眩しくて、講演しにくいこともあります。

講演者が、プロで、テレビ慣れや、タレント慣れなどしていると、かえってスポットライトなどの注文をつけたりすることがありますが、通常の講演者は、光の角度や光源の露出について、不慣れで、そのために、心理的、生理的に疲れ、せっかくの講演が精彩を欠くことも起りかねない。

照明は、単に演者のみを照明するだけではなく、会場の雰囲気や気分を構成することも必要です。

演者も眩しくなく、観衆にも眩しさを与えないようにするために、以下の点に留意すること。

● 照明器具の照射角度

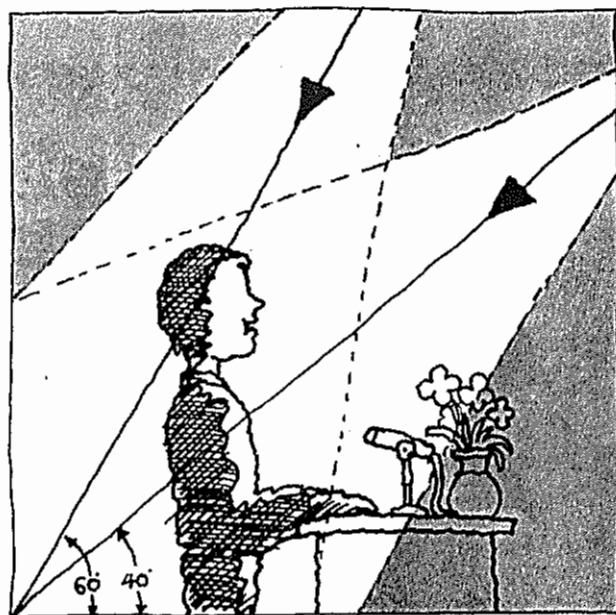
演者に対しての照明器具の角度が平行ならば、甚だしく眩しい。

理想的には 40° ～ 60° の照射角度がよい。講堂、体育館などでは、演壇が高いのに、照明器具の設置位置が低く、演者と平行か、それ以下の角度から照射すると、演者も、観衆も見にくく、慣れない講演者などはそのためにしばし、目が眩み、著しく疲れるものなのです。

逆手にとれば、短い時間で講演をすませたい場合、例えば、演者持時間10分～15分などの時間制限の場合、このような照明を意識的に使用すれば、時間の短縮は間違いないか、そのために演者から苦情のくることも覚悟しなければなりません。

● 照明器具の照度

通常500Wから1,000Wの照明器具は、ホール、会館の設計に順応しているので、比較的良好な照明が得られますが、体育館などで、2kwや5kwのスポットを不用意に使用すると、明るさをアピールするにはよいが、ただ演者が眩しくて、まるでテレビ中継の



ようになってしまうのです。

テレビ中継ならば、あらかじめ、そのように設営されて、点灯されるので、演者が、眩しいだけではなく、全体の明るさを考慮しているのも、むしろ問題はない。

このように、照度を計算すれば、テレビでも1000 Lxあれば充分です。

大統領選挙でもないのだし、5kwや10kwで明るくすることが、1000～2000人位の会場が必要かどうか考えれば判ることです。

ハ. 観衆が演者を見やすいこと

よく、みられる現象ですが、演者の附近が明るくても、かんじんの演者の顔がなぜか、少しみにくい、などということがあります。これは、演者に照射しているスポットがないか、少ないかの現象です。フロントサイドスポットを点灯して、演壇を明るくしても、演者その人に、照明をしなければ、効果はありません。

通常、講演者はマイクスタンドの前に立って講演するわけで、万一、演者がマイクを持ち、自由に客席内を歩いても、充分に彼、または彼女の顔がみえる明るさは必要です。

二. 客席内の明るさ

最近、水銀灯、クールレイランプ、蛍光灯などで、カクテルライトなどと称して、会場内を白昼のよう



に明るく設計してある処が多い。ところで、この客席内の明るさが、演者の演壇附近と同じ明るさでは、落ち着きがありません。

講演会はスポーツにあらず、別に白昼のように明るくする必要はない。

むしろ、水銀灯などは消灯して、客席内を落ち着いた明るさの雰囲気にするのが肝要なのです。

照明を扱う人は、ただ照明器具を、点灯消灯するだけでなく、その催し物の雰囲気を把握して、演出照明として表現することが望ましい。

照明器具の点灯、消灯も単なる電機操作ではなく照明操作でありたいものです。

ホ、看板、めくり等をみやすくすること。

通常の講演会は、吊看板、立看板などを使用するので、ボーダーライトの後方に吊るなどして、全体

にみやすくする必要があります。

止むを得ず、ステージスポットで照射する場合は、全体にムラなく均等に照射すること、一部を強調すると、紙質によっては眩惑したりするので、注意すること。

その他、スライドを投映する場合は、客席内の点消灯も必要ですし、場合によっては演者へのスポットライトも必要となります。

講演会は、シンプルな背景が望ましい。通常、黒幕でよいが、会場によっては、派手なカーテンの場合、(例えば、赤、金、黄)カーテンの照射を落して、演者がみやすいように配慮すること、また演者の衣裳の色彩など、事前に判れば、光量の調節を必要とすることもあります。

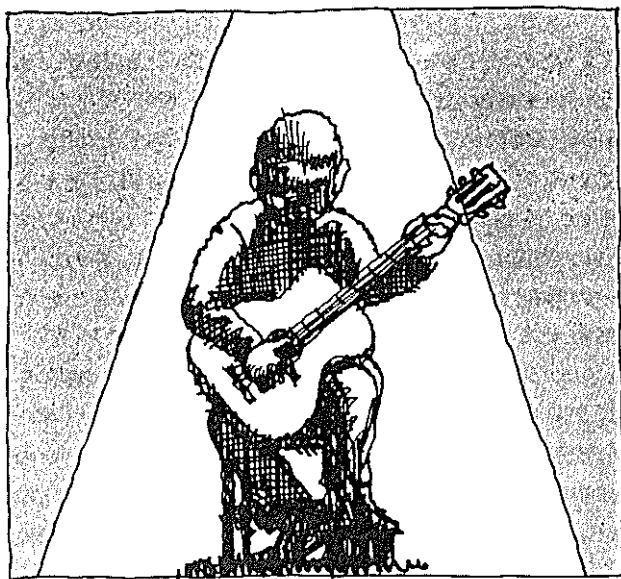
2. 演奏会(主としてクラシック)

この場合の演奏会は主としてクラシックですが、演奏会も、個人と集団とは異なります。

使用する照明器具は、ボーダーライト、シーリングライト(フロントサイドライト)、

独奏会では、ピアノ、ヴァイオリン、チェロなどの楽器では、照明は、演者附近がもっとも明るいこと。

ギターの独奏会では、サスペンションスポットを要求されることもあります。これは、ギターという楽器の特質上、明らかに、照明効果を意図しているからです。(エレキギターは論外)



またギター演奏では、1台のサスペンションスポットが非常に効果的であることもあるので、演奏者とは、位置を十分に打ち合わせること。往々にして照明は何処の位置でも、自由に照射できるものと考えて、自分勝手に動く演者もいるので要注意。

ピアノ演奏者は、客席からみて左側、即ち下手側に演奏者が位置することが多いが、上手側の場合もないとはいえない。通常下手側なのは、演者の右手の動きがみえやすいからで、ピアノの鍵盤に影をつくらないように配慮しなければならない。フロントサイドスポットの使用は注意を要します。

しかし、演奏者によっては、鍵盤上をより明るく要求する場合もあるので、鍵盤の上部から、サスペンションフラッドライトで、明るくするのもよい。

尚、ピアノの楽譜も勿論、見易くすること。

個人演奏会や、4～5人の演奏会、例えば弦楽四重奏などの場合は、演者の顔を中心として、全体によく演奏する手の動き、顔の表情まで、よくみえることが肝要です。

クラシック演奏の場合は、楽員及び楽器が、観衆からよく見えることが基本です。また演者が充分、楽譜を判読できる照度が必要です。

オーケストラの場合、指揮者の手が楽員からも、観衆からも明瞭にみえること。

合唱団の場合、全員の顔が客席後方からでも、充分に見える明るさが必要。

演奏会で、よく照明の論議の中心になるのは、客席内の明るさです。

これは、照明中心に考えれば、観客席を暗くすれば、よく見えるし、注意も集中することになります。

しかし、演奏者が、観衆との交流によって、優れた演奏をひき出す場合は、観客席は、開でなく、適度の明るさ、つまり観客が見えなければなりません。

また観客も、開のなかから光の輪のなかにいる演奏者を観賞しているだけではないので、客席内の明るさが、ある程度必要です。

特にクラシックは、開のなかの芸術ではなく、むしろ、言葉をかえていえば、光のなかの芸術です。

客席内を明るくするか、暗くするかという問題は、演出照明であって、いずれをとるにせよ、演奏者とよく打合せして、了解をとる必要があります。

通常は、観客がパンフレットを判読できれば、よいという明るさになっています。

ホールによっては、反響板に照明器具が埋込型になって、天反の照明だけで処理しているのみかけがあるが、これも演奏会によっては、少し暗くみえることもあるので、補助光として、シーリングや、フロントサイドで、カバーする必要がある。

ボーダーライトで処理する場合には、正反に影が出ないようにし、また楽員にも影をうつらぬように配慮すること。

簡単な演奏会でも、照明に神経がゆき届いているのは、みても心よいものです。

音楽ショーの照明

前島良彦

東京舞台照明



前回は、あかり屋としての私の考え方をごく抽象的にお話ししました。

この前のときも思っていたのですが、文字→文章→印刷物→そして自分の知らないところで誰かに読まれる……というパターンは、どうも私の感覚とピッタリこないのです。ですからアレッキリと思っていたのですが、編集部の人々の強引さに負けて、もう一度登場いたしました。

ロックやフォークなどの「音楽ショー」では演っている側と観ている側が、ひとつに溶けあったとき、その「ショー」は成功したといえます。ですから演出の意図するところは、観客をどうしたらそのショーの雰囲気の中へひっぱりこめるか、ということに集中するはずで。

私がショーの照明プランを考えるときは、観客をどうしたら興奮させることができるか、どうやらノッてくれるか、ということだけ考えます。その基本的願望をいつでも頭におきながら、大ざっぱに「ショー」を3つのパートに分けて考え、夫々に「ヤマバ」を作るようにします。

まずは、オープニング部分です。音楽ショーでも芝居でも導入部は大切です。これがまずいと、お客がそっぽを向いてしまいます。

次に中間部のヤマバ、そしてエンディング部の最高潮へと、盛り上げるようにして行くのが、私のやり方の普通のパターンです。勿論いつもこの型ということではありませんが……。

ところで、私はよく知り合いの学生さん達から「音楽ショーの照明プランは、どう作ったらいいか」という質問を受けることがあります。そういうときに、私が逆に質問したいことは「芝居の照明」をやったことがありますか、ということです。私は芝居の照



明をカケダシの頃から数えると、ざっと10年以上やってきました。芝居の照明には、リアリティーが要求されます。いかに本当らしく、情景を表現するかが、非常に大切なのです。そのためには、照明に関する基本的な知識や技術が、どうしても必要になってきます。

何故こんなお話を、急にしだしたかといえますと、ロックやフォークの照明は、音楽自体が主観的、感覚的なものなので、リアリティーをそれ程要求されないのです。それゆえ、誰でもとっつき易いといえますか、パッパ、パッパとスポットライトで色を変えていけば、なんとかなっちゃうところがあります。ところがこのやり方はどうもうまくないのです。観客がもうひとつのってきてくれません。なんだか解らないうちに、ショーそのものが終わってしまったということになります。

学生さんたちは、プロの照明家に頼んで照明プランを作ってもらくと、ピタリときまるのに、自分たちでやると、どうもキマラナイということをよくいいます。

そうなのです。プロとアマチュアの違いはそのキマラ、キマラナイにあるのです。

ちょっと理屈ぼくなくなりましたが、ようするに、キチンとした基礎の上になって、お芝居は客観的に、音楽ショーは主観的に演出していくものだ、というように考えてください。

とりあえず、以上のことを頭のどこかにヒッカケておいてもらって、ヤマバ作りのお話をしましょう。

さて、いくら基礎が大切ということが解っても、急に今日から勉強しはじめて、明日はもう身についているというわけにはいきません。そこで、こう考えてください。皆さんの場合は、やってみることで、

なんでも試してみることが、基礎づくりの勉強なのだ………。基礎は、そうやって勉強しながらやってみてゆくとして、また問題がありますね。照明器具の数や、調光設備の有無や、電気容量や、公演場所など。その他、たくさんの制限があるでしょう。

ですから、最初からワンステージに、イントロ、中間、エンディングと、3つもヤマバを作り、全体の流れを統一して盛り上げていこうなどと、考えないで下さい。

とにかく最初は、1つだけ、ヤマバを創ってみるということが良い結果が得られると思います。ワンステージに10曲あるとします。まづは、オープニングの1曲、これに全力投球してください。あらゆる許された条件を利用して、観客を「ハッ」とさせる工夫だけするのです。初歩的な段階では「ハッ」とさせることができれば充分成功です。それがうまくやれそうだと思ったら、エンディングの曲に、それと同じことをします。ただし、色だけは変えた方がいいと思います………。

一度成功すれば、自信がついてきて、それから次々と新しいアイデアが増してきます。

とにかく、やってみてください。くれぐれもいっておきますが、最初はイントロの1曲だけです。どの曲にもヤマバを作ろうとするのは、一番まずいやり方です。完全主義はゼツタイといっている程、失敗の原因になります。

ところで、参考になるかどうか、少し余談をいたしましょう。

私は、ロックにはグリーンと赤とか、クラシックだったらブルーと白といったように音楽に対する、光の色のイメージをもっています。クラシックの照明をやったことはありませんが、音楽ショーの照明

をやるときは、音と色のイメージ対置ということができれば、とても大きな武器になります。皆さんも夫々に自分の色のイメージをもつようにしたらどうですか。

それから、音楽ショーの場合、タブーということはありません。普通、お芝居のときはけっしてやらないことでも、やってみることが、成功するためのひとつのポイントになることがあります。例えば、光源（照明器具）を露出して、観客にみせるとか、スポットの明るいのを観客の方へ向けて照射するとか、あるいは、これは照明プランの外ですが、音響スピーカーをステージの上に、デンと置いてしまうとか。

また、音楽ショーでは多くの場合、 Horizont を使用しませんが、私はこれも時々効果的に使っています。例えば、前述の「色のイメージ」を、突然、Horizont一杯に照射するといったふうなんです。

それから器具数や施設の制限ということですが、これも与えられた条件を充分使いこなさないで、不平をいっている人が多いように思います。

例えば1本のスポットライトで、5色も10色でも、色を使い分けることだってできるでしょう。プラステートを重ねるのです。

この手は、私はよく使います。私の場合は器具数の制限というよりも、濃い色を出したいとか、暗い照明で色を感じさせたいとかいう場合ですが……。

私の場合、スライダック等の調光器も条件の許すかぎり使わないようにしています。何故なら、光は、100vのときが、一番美しく感じられると思っていますので、絞らなければならないときは、前述のフィルターを重ねるというやり方でカバーする場合があります。まだまだ、いろいろあるのですが、紙

数の都合もありそうなので、余談はこれくらいにしておきましょう。どうぞ少しは参考になりましたか。

ところで、ヤマバを成功させるための照明プランをたてる時、一番のキメ手はなにかをついでにお話ししておきましょう。

それはヤマバ用のネタです。みている人をハッとさせたり、ビックリさせたり、カッコイイと感じさせたり、目のさめるような思いをさせたりするためには、いつも漸新な「ネタ」を探しあててやろうという意欲をもっていることが必要です。

ですから「ヤマバ創り」の決め手は、「ネタ探し」なのです。私達もいつでも一番苦勞するのが、このネタ探しです。このために殆んどのエネルギーを費しているといってもいい過ぎではありません。

それにこのネタは、私がここで皆さんに教えてあげられるといったものではありません。

前回にも申しましたが、鋭く、若い感覚で、いつでも自分をキタエておくことです。

そうすれば「ネタ」はどこにでも、コロがっています。自然にむこうからやって来ますよ。

どうか、皆さん自分で探してください。それこそが音楽ショーの照明プラン創作の源なのですから。

私の日本舞踊照明

十
水
泡



● 偏見による日本舞踊の分類

日本舞踊には、きちんとした日本音楽によるものからレコード舞踊まで各種あるが、私流に分類してみたいと思う。

1. お座敷物—地唄舞踊など
2. 劇場物—能・狂言
3. 野外物—舞楽・郷土芸能・盆踊

などに分けられる。

それでは、照明的に考えてみると、1と2は、余り関係はないと思うが、1の座敷物は絶対に野外とかスタジアムとかで上演されるものではない。せいぜい、四・五人から、多くても十五・六人までです。本来は屏風前で燭台2本で踊られて来たものであり、心理描写を「舞」という姿であらわすものであるから、照明としては、ハレーションがでるほど光量があってはいけないし、だからといって暗すぎても困るが、ましてや色彩については「舞」そのものを傷つけるものであると思う。

野外に於ける舞踊の場合は、この場合不要であると思うので、2の場合について主に書いてみたいと思う。

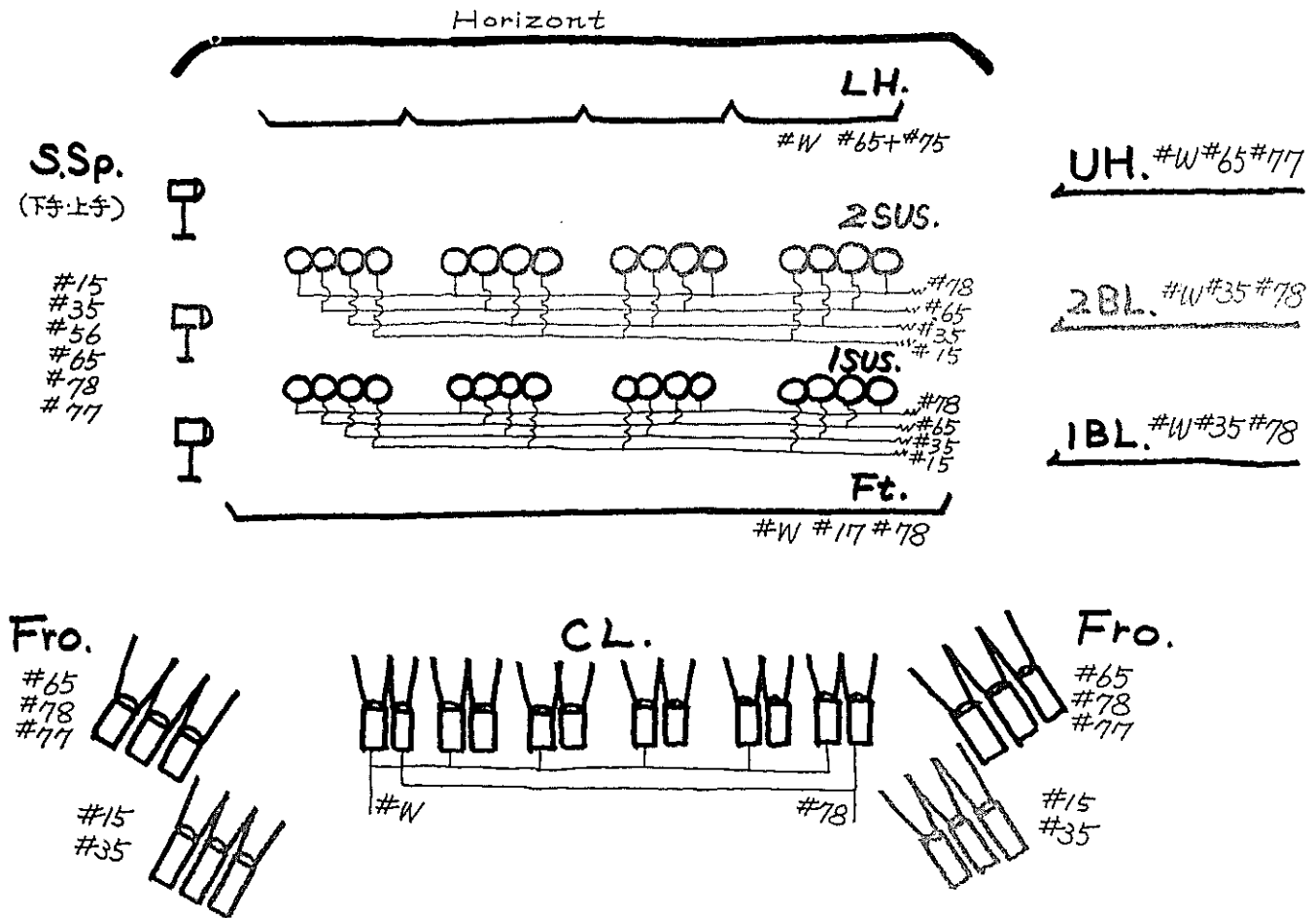
その前に劇場史について少しふれておきたいと思う。〔引用は日本舞台照明史による〕

西暦1603年、慶長8年4月に出雲阿国が京都で歌舞伎踊を演じたのが日本舞踊の緒といわれている。1624年、寛永3年頃から板囲のしてある芝居を見るための設備ができ始める。1661年、寛文1年に能舞台をまねた舞台ができはじめるが、観客席は芝居の言葉通り芝生の上に箆を敷いただけのものであった。1716年、享保の頃より箆を掛けた屋根ができはじめる。それも全部ではなく、舞台の屋根が観客席にのびてきたという感じである。全蓋化されたのは1739年、元文4年の時である。明りは、ロウソクが使われていたが、舞台に使われていたわけではなく、楽屋とか、奏楽で使われていただけであるから、舞台は非常に暗かった訳です。

ロウソクによる火災があまりに多かったため、永いあいだロウソクを使うことが禁止されていた。1791年、寛政3年に発行された式亭三馬「戯場訓蒙図彙」（しばい、きんもうずい）に窓番という言葉が載っているが、大屋根と客席敷敷の間に1間位の高

日本舞踊については（社）日本照明家協会の機関紙「日本照明家協会雑誌」に日本大学芸術学部の田中恒雄先生が「日本舞踊に於ける照明の定式」という著を連載されているので、それをお読みくださればよくわかりいただけると思います。

しかしてこの連載は総論等のみなので、それを幸いと学問的史観は田中先生の著に乗っかるとして私は実用篇をこのマルメニュー的、独断と偏見で少し紙面をうめさせていただきます。



さで窓を開けて、この窓を開けたり閉めたりして光量をかげんしたのである。1803年、享和3年に発行された「羽勘三台図絵」には「指出し」という今でいうプロフィールスポットのかわりをする、長い柄のついたロウソクの図が出ている。

1875年、明治8年に横浜の岩井座という所でガスによるフットライトが使われたのが、ガス照明の最初とされている。明治15年12月に北白川宮邸において天覧芝居があり、この時アーク灯が使われたという記録がある。明治17年5月大阪道頓堀中座に最初のアーク灯が点灯されたのが劇場に於ける、電気照明が使われた最初である。明治30年頃には電気照明が使われたが、観客席の明りとしてシャンデリア(但し16燭光が36灯点灯されているだけ)が使われていた。舞台の方は、16燭光の電気が3灯位ついていたシャンデリア風のものがあったにすぎなかった。

明治44年に新築された東京帝国劇場には、ボーダライト、フットライトがドイツから輸入されて設備され、調光器も付けられるようになった。明治44

年というのは1911年のことであるから、日本で最初にボーダライトが点灯されてから66年しかたっていないのである。

日本照明家協会の会長さんで、現在でも商業劇場の照明プランを書いている小川昇先生も私は目をつぶれば舞台照明のない舞台をまぶたの裏に画くことができるというらしい。このことでも解る通り舞台照明の歴史は、つい最近始まったのだということは、ご理解いただけると思います。

ここにながながと劇場史の話をしたのは、日本舞踊のほとんどの物が歌舞伎の所外事から出ていることは、皆さんもご存知のことと思うが故に日本舞踊の古典はこの劇場機構の影響を受けていることは間違いないことである。

また、能・狂言も、野外に建てられた舞台で演じられるものであったから、(これについては、前出田中先生のお話の中にくわしく出ているので、ここでは省略する)能・狂言から出てきた舞踊は原則的にパーー明より「明り」の作る方法がないわけであ

る。

日本舞踊の古典がパター明りの理由は、以上のように、明りのない所（太陽光以外は、照明らしきものがなかったという意味）で上演されて来たものであるから、それなりに工夫されて来ているので、能・狂言もと同じパター明りが一番良いはずである。

「松羽目」物に色が付いていたりすれば、本来の意味からはずれることは、皆さんもご存知の通りである。しかしパター明りといっても、全体的にフラットな太陽光の副身光の感じで作られた照明なら非常によいと思う。ギンギラギンの目の痛くなるようなパター明りは、パター明りとは言えないのではないか。

しかし古典といってもこの60年余りの照明の歴史の中で、役者の工夫によって、照明の工夫がなされてきた。また、藤蔭会に於ける遠山先生のように専門家と演出家の手を経て、その舞踊にあった照明も創けられて来た藤蔭会における、新舞踊運動の舞踊に対する照明のかかわりは、その後の古典の上演に多大な影響を与えたことは、否定できない。現在上演されている古典舞踊及び大正末から昭和上期の新古典舞踊は、大いに創意工夫がなされていることは、間違いない。なにしろ、なにもない所から、創られたものだからといって、馬車が自動車にとって変られたように、少しずつでも変化して行くであろうことは、皆さんもご理解いただけると思う。

歌舞伎における用語に「定式」（じょうしき）という言葉があるのは皆さんもご存知のことだと思うが、この定式に「物」を付けて定式物という言い方がある。歌舞伎から発生した古典舞踊にはその「型」が完成されているだけ定式化されていると考えてよいと思う。背景大道具・小道具・衣裳など、どれを取ってみても上演の度に大きく変るということはない。ということは、照明においても、先程の言葉とは違うように聞えるかもしれないが、大きく変ることはないと思う。松羽目物は松羽目物らしく、しかないと思う。

それでは、照明の作り方といえば、舞台照明の場合「その劇場」に対する演出家の演出意図と、照明家による照明プランの一致を見て、実現されて行くのであるが、共も述べたように、舞踊という完成されている型に対しては、「より観客に印象づけるか」

にあると思う。それでは、'どうするか'といえば、その物語に対して、また、状景（大道具・背景）に対して、また衣裳に対して、どれをとってもよりその意図に忠実になるより仕方がないと思う。いわゆる「リアリズム」である。リアリズムという小難しく考えがちであるが、より舞台的ということである。四角囲みの一方を取払ってしまった、舞台という空間は、一般の人が見ている状態とは、大きく違うものであるから、リアリズムというデッサンを通じて画きあげた、舞台らしさが必要だと思う。誤解されやすい言葉なので使いたくないのであるが、「よりそれらしく」に忠実になることだと思う。

例えば「保名」における心理描写を照明で説明したのでは「踊り」そのものの必要がなくなってしまうかねない。道成寺がへびの化身だからといって、あの華やかさをしょうぼりした明りでは困るわけである。まだ、鶯娘が明かるい海岸に立っていたのでは、これは話の外です。あくまでも雪の降るさむざむとした所にぼつりと立っている怨霊の化身としての鶯が衰わせれば、それがリアリズムでは、ないでしようかといっても、あとの引き抜きの場（幻想シーン）はブルーで行くのは定式ではなく、状況の変化があったのであるから、明るいパター明りで行くべきだと思う。

紙面の都合で一本一本の照明を作って行くわけにもいかないの、同じパター明りでもその内容によって折頭でスインチェインする。

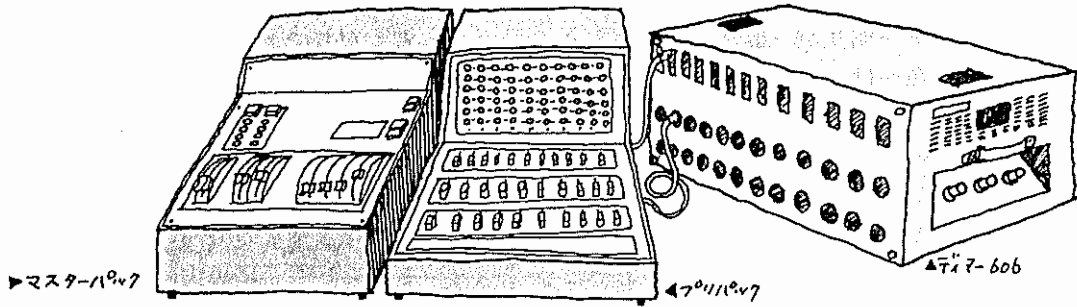
パターで行くが、ローホリからシルエット気味に入れるか、桜の吊り枝を0.0何秒早めに入れているか、色々工夫があってもよいと思います。ともかく照明は、日々進歩して行くものだと思います。しかし、あくまでも、その舞踊を確実に選んでからにしてほしいと思う。花道から出てくるのにシルエット気味に明りが入ったのは行きすぎを感じたのは私ばかりではないでしょう。一応、演習会程度の照明の総仕込図を書いてみました。参考になれば幸いです。

＊

追記、この原稿が書き上げた時点で、田中恒雄先生が、日本照明家協会の東京の月例研修会（毎月18日中野サンプラザ5階トレヤ集會室 入場無料）の11月18日に講義なされたその内容が協会誌（400円）1月号に発表されていますので、合せてお読みください。私の文章をお読みになるより、正確でわかりやすいと思います。

●使ってみませんか●

60 A (30 A) 用可搬型調光器



●特 長

- デイマートランク・マスターパック・プリパックを組合せて、劇場・テレビスタジオの調光システムと同じ機能をそなえています。
- デイマートランク60A(30A)×12本プリパック（プリセットフェーダー12チャンネル×3段マスターパック（マスター、グループ、クロス・フェーダー）をワンパックとして、何パックでも自由に組合せて使用できます。

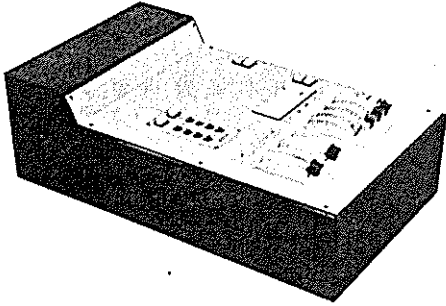
●名称(種類)

1. マスターパック
2. プリパック
3. デイマー606
4. アンプパック
5. 制御コード
6. フリーパック
7. ピンクロスパック
8. 直プリパック
9. 直-610
10. 電源分岐盤
11. 移動用ケース
12. ファミリーデスク

●適用電源

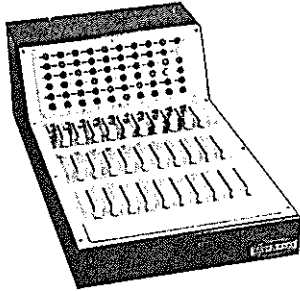
	名 称	標 準 品	特 注 品
1	使用電源電圧	AC105V±5V	AC105V±5VおよびAC220V±10V
2	相 別	1φ 又は 1φ 3W	1φ 又は 1φ 3W
3	周 波 数	50Hz. 60Hz 手動切替式	50Hz. 60Hz 手動切替式
4	操作用AC電源	AC100V±10V メーター付	AC100V±10V. 220V. 105V手動切替式 ボルトメーター付
5	制 御 電 圧	DC 0V ~ 10V	DC 0V ~ 10V

● マスターパック



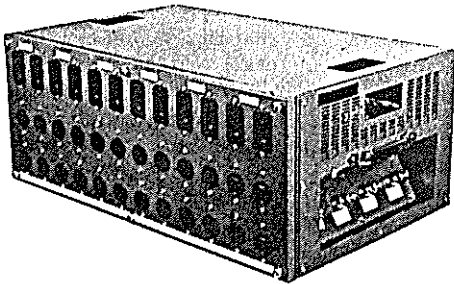
マスターフェーダー(記号MF)PF型 1個
 クロスフェーダー(記号A-CF-B)PF型.Lsw付・1set
 グループフェーダー(記号G1 G2 G3 G4)PF型 4個
 場面切替スイッチ(ウィンク型 黄マーク) 1set
 段表示灯(スタート、スタンバイ表示)..... 3個

● プリパック



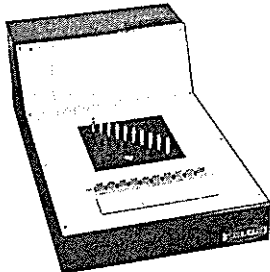
プリセットフェーダー(直線式).....12個×3段
 PFG押釦スイッチ(ウィンク式).....12個×3段

● デイマー606



電源端子台AC100V. 1φ 2w 1φ 3w12φ ボルト
 外部操作用電源コンセントAC100V 1個
 60A用白熱灯調光器..... 6台
 調光出力用コンセント(A型30A×2 T型20A×4)/1回路当り
 6回路分
 直用(兼器具テスト)コンセント(A型30A×1 T型20A×1) /
 1回路当り..... 1回路分
 電圧計および表示灯.....各1個

● 直プリパック



ピンボード10分岐×10場面.....1面

価格

マスターパック 300,000
 プリパック 12×3 225,000
 デイマー 60A×6 900,000
 30A×12 900,000
 電源コード 20mもの 30,000
 信号コード 20mもの 100,000
 制御出力コード 1mもの 20,000
 信号コード 1mもの 5,000

★編集後記

●マルモ・ライティング・ニュースは、年間に4回発行しています。友人、知人の方々に、ライティング・ニュースを役立ててくださる人をご紹介ください。無料でお送りします。

●読者の皆さんの、ご希望をなるべく、内容に反映させてゆきたいと思えます。希望される記事、ご意見をマルモまでお知らせください。

舞台照明関係の書籍紹介

近日発行 舞台関係者必携!

「舞台用語実用事典 その2」

牛丸光生監 / 彩光社版

●やさしい舞台照明入門

牛丸光生著 2,000円 / 彩光社版

*

●舞台照明

大庭三郎著 2,600円 / オーム社版

*

●初歩の舞台照明の手びき

柘植卓輝編さん 1,000円

*

●オペレーターのための舞台照明の技術

柘植卓輝編さん 1,300円

*

御希望の方は、ハガキに住所・氏名・年令・職業を明記の上、マルモまでお申込みください。

●マルモ製品についての御問合せは

本社 東京都千代田区神田須田町1-24
TEL(03)(252)0321(代) 千101
名古屋出張所 名古屋市中区栄4丁目1-1中目ビル
TEL(052)(261)1111(225) 千460
大阪出張所 大阪市北区神山町3-2
TEL(06)(312)1913 千530

●ご注文のときはマルモ製品とご指定ください。

(株)東京舞台照明 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-51-4
TEL(03)(404)2611 千151
大阪市北区大工町12(駒村ビル)
TEL(06)(353)1806 千530
ほりぞんとあーと 札幌市中央区南4条西8丁目
TEL(011)(221)3101 千060
北電力設備工事(株) 札幌市中央区南2条西12丁目
TEL(011)(241)3911 千060
盛岡舞台総合研究所 盛岡市南青山町11-14
TEL(0196)(47)0736 千020
(株)共立 東京都渋谷区代々木5-40-13
TEL(03)(469)1501 千151
SBSプロモーション 静岡市曲金6-6-50
TEL(0542)(82)2575 千420
キープ舞台照明 甲府市朝日4丁目5-18
TEL(0552)(52)5151 千400
若尾総合舞台研究所 名古屋市千種区大島町3-45
TEL(052)(762)2294 千460
(株)三光 名古屋市東区東桜2丁目6番14号
TEL(052)(931)3238 千461
(有)総合舞台はぐるま 岐阜市西野町1
TEL(0582)(63)5693 千500
(株)金沢舞台 金沢市東力町2丁目92番1号
TEL(0762)(91)1418 千921
(株)新日本電機製作所 大阪市北区曾根崎上1丁目21
TEL(06)(312)2604 千530
(株)篠本照明 広島市霞町4-296-15
TEL(0822)(53)7246 千734
四国照明サービスセンター 徳島市中常三島町3丁目4-2
TEL(0886)(54)2414 千770
四国舞台テレビ照明 高知市大川筋2丁目3-13
TEL(0888)(23)7729 千870
福岡市民会館サービスセンター 福岡市中央区天神5-1-23
TEL(092)(787)6474 千810
ユニーク・アート・ステージ 大分市金池南1丁目3-26
TEL(0975)(44)1083 千870

発行 丸茂電機株式会社
東京都千代田区神田須田町1-24
千101 TEL(03)(252)0321(代)
製作 キャピタル企画
(不許・複製)

取扱店